

「社会批評との関係から見たグローバルな 「腐女子」マンガ文化の可能性と限界」

杉本＝パウエンス・ジェシカ

京都精華大学国際マンガ研究センター (IMRC)

要旨

近年、日本の腐女子文化、特に腐女子マンガ（ボーイズラブ=BL マンガ）は、あらゆる形で海外に広まっている。正式に認可、翻訳、出版されるものもあるが、その多くは、ファンの力で、非公式な（違法ともいえる）ルートで流通されている。BL マンガはかなり独特なジャンルで、そのテーマは「女性が女性向けに描く男同士の恋愛・性愛」である。日本とその近辺にある東南アジア諸国の女性だけでなく、異なる文化的、社会的背景を持つ世界中の女性が、このBL マンガを支持している。同様にBL 研究もまた近年では、国内外で盛んになっている。国外の学者が言語の壁と戦いながら、日本のBL マンガと腐女子文化に興味を示しつつある一方で、日本国内の学者の多くは、BL マンガや腐女子文化を「日本限定」として扱い、海外での広まり、及び比較文化的な面を軽視し続けている。そういった現状を本発表で考察した後、そもそも何故、学者としてBL マンガや腐女子文化をグローバルな現象として扱うべきなのか、これからのBL と腐女子コミュニティの研究にどんな可能性を期待できるのか、また、どういった限界が現れるのか、そしてBL マンガと腐女子文化研究と社会批評の関係について論じたいと思う。

1. 問題設定と本発表の構成

簡単にいうと、BL とは boys' love の略で、男性同士の恋愛・性愛を意味し、女性向けマンガと文学のジャンルであり、アニメやゲームなど様々な媒体で制作されている。しかし、その多様な広がりにもかかわらず、BL に興味のない一般人（特に男性）からは「不可視」なものとして扱われる現象も見受けられる。2004 年に大阪大学でのマンガにあまり詳しくない若手研究者の集いで、BL と腐女子文化について発表した。参加者は、ほぼ全員男性で、彼らは筆者の発表に対しまともにコメント出来ない状況だった。説明不十分の筆者にも責任があるが、一社会学者として、同僚のコメント機能を麻痺させてしまったこともまた興味深かった。

「そういう現象が存在すると全く知らなかった」「ショックが大きすぎて今の気持ちは言葉にできない」等の「中立的」な反応もあれば、はっきりと強い嫌悪感を表す対立的な反応も見受けられた。「BL ジャンルの存在を知らなかったが、こんなものはあってはならない！」というような、いきなり倫理的評価をした人すらいた。その翌週、また同じメンバーとの会合があったが、ほとんどの男性学者が、身近な女性にBL と腐女子について聞いてきていた。そして、また彼らは「ショッキング」な事実を発見してしまったという。

彼らが聞いた同世代の女性は、全員、BL ジャンルと腐女子の存在を把握しており、妻や姉妹、研究仲間等、周りにBL ファンや腐女子が大勢「潜んでいる」ことを発見した男性が数人いた。彼らはまるで急に自分の周りにいた裏社会の秘密組織の存在にやっと気がついたようだった。

筆者はその後、京都精華大学のマンガ学部で教える様になり、学生に海外でもこのジャンルは人気があるという話を話すと、男子学生の中にはBL ジャンルと腐女子の存在を既に把握していたにもかかわらず、「こんな恥ずかしいものを日本は輸出すべきではない」という意見を持つ者もいた。BL マンガと腐女子

文化を否定する男性は国内外にいて、これは、ジャンルをいまひとつ理解していない人の「典型的」な態度だといえる。マンガ研究においても、その傾向が見られる。2009年12月京都国際マンガミュージアムにおいてフランスのBD学者のティエリー・グルンステン^{T h i e r r y G r u n s t e n}も、BLジャンルとは日本限定のものであるため比較研究をするほど重要なものではないと暗示する発言をしている。私はこの誤解をどうにかして解消すべきだと考えた。

本発表はこの「誤解」をどうにか解消するための試みでもある。これから、まず従来の研究でみられるBLと腐女子文化言説とは何かを述べながら、その言説の問題点を指摘し、問題解決案をいくつか提案していきたい。その後、グローバルなBLマンガと腐女子文化研究と社会評論の関係について述べていく。

2. BL マンガ・腐女子研究の現状

腐女子研究では、まず腐女子が趣向するジャンルの「定義」について必ず議論される。「少年愛」「やおい」「ボーイズ・ラブ」、これら3つの言葉を互換的に使う研究者もいれば、この3つは全く別ものだと主張する側もあり、定義についての討論がしばしば起こっている。ひとまず本発表では、「BLマンガ」は、商業的でオリジナルな作品を指し、「やおいマンガ」は二次創作か同人誌を、そして「少年愛」は1970年代の「初期のBL」や耽美作品を指す事にする。

他に未だに議論されているのは「動機」である。BLジャンルを知らない人は、その内容が「男性同士の性愛」と聞けば、この手の趣味は「普通の感覚の女性」のものではないとしてしまう。では何故、腐女子がBLを制作・消費するのか。この問題については、これまで様々な学者や評論家によって分析されてきた。しかしそれは、腐女子文化の「説明」というより「弁明」が学者によって提供されていて、まるで腐女子が悪いことであるかのように、彼女達の趣味が説明されている。

例えばまずジェンダー・スタディーズでよく見られる精神分析的な洞察として、腐女子の動機はある程度「病理的」だという主張がある。青山智子^{あおやまともこ}(1991)、鈴木和子^{すずきかずこ}(1998)、中島梓^{なかじまあずさ}(1991, 1998)、藤本由香里^{ふじもとゆかり}

(1998)や大城房美^{おおぎふさみ}(2001)等の論点によくみられる傾向では、BLマンガの魅力は現実逃走や(女性としての)ジェンダーパフォーマンス回避等にあるとされる。腐女子はとにかく性的アイデンティティに不満を抱き、男性性にあこがれているという主張が頻繁にみられる。こうした自らの女性性に消極的で暗い腐女子の動機の捉え方に対してもっと明るく?積極的なものであるという学者が現れる。そうした学者の多くは、腐女子でありながら腐女子文化を研究し、インサイダーの視点から出発して、こういった趣向は病理的ではないということを前提に様々な側面から研究を進めている。

長池一美^{ながいけかずみ}は2007年BLマンガに登場するアラブ系キャラクターの他者化を分析し、BLマンガの中で描かれる人種問題と日本社会全体におけるポスト植民地主義に触れながら、BLはジェンダーのコードを解きやすくする手段であると主張している。堀あきこ^{ほり}は『欲望のコード—マンガにみるセクシュアリティの男女差』(2009年)(図1:表紙を飾るのは二人の少年)で、男性向けマンガ、女性向けマンガ、そしてBLマンガの「欲望のコード」、性描写のなかのエンコーディングを分析している。溝口彰子^{みぞぐちあきこ}と東園子^{あずまのこ}は腐女子同士の繋がり、女性のホモソーシャルなコミュニティの側面に注目する。溝口(2010)によると、BLマンガの同性愛のコンテンツについて熱く語り合う腐女子は「ヴァーチャル・レズビアン」であり、腐女子同士間では、腐女子ではない女性にはみられない深い関係性が産まれるとする。そして東

の宝塚劇場のファンと腐女子文化の比較では、女性ファン同士の活動にこそ強い意味があるのだと論じている。

海外では、オーストラリアのマーク・マックリーランド^{M a r k M c c l e l l a n d}や台湾の周典芳^{Chou Dienfang}の他、多くの学者がBLと海外の類似のジャンルについての分析や論文を発表しているが、海外におけるBL研究は、日本ではあまり知られていない。海外の学者が日本の学者を引用する事はよくあるが、その逆の場合は稀である。日本の何人かの研究者が、英語でもBLや腐女子について論文を発表し、海外と日本の渡り橋の役割を果たすこともできるはずだが、ここに腐女子研究の溝があると思われる。

国内の多くの学者は、未だにBLマンガとBLジャンル全体を日本国内限定の現象としてしか扱っていない。中島梓の『タナトスの子供たち』(1998年)と水間碧『隠喩としての少年愛』(2005年)では「海外には類似のジャンルがある」ということに言及されているが、BLマンガが海外にどれほどの反響をもたらしているかについて研究する日本の学者は少ないというのが現状である。

国内で、海外の腐女子文化についての研究に興味がないことを裏付けるもののひとつが『Boys' Love Manga』(2010年)(図2:この表紙に書かれているキャラクターのモデルは、あしべゆうほの『悪魔の花嫁』のデイモスとX-ジャパンのHideと推測される。アーティストは中国人のHeise)という研究書である。掲載論文のすべてが海外の学者によって書かれ、海外のBLマンガの人気、腐女子の性志向の曖昧さなどを探る非常に興味深い論文が14本も載っているが、日本の執筆者は一人もいない。この研究書に日本国内学者の視点もあれば、もっとバランスの良いものができたのではないかと思われる。

日本国内で国内の学者達によるBLマンガについての重要な議論がされる中で、海外のBLマンガの広まりを「論外」もしくは「関係ない」とする態度は非常に残念である。まさしく小田切博が2009年、第1回国際技術会議「世界のコミックスとコミックスの世界」で指摘したように、日本のマンガ研究言説は、ガラパゴス島にいる状況となんの違いもない。トランスナショナル、比較文化的なBLマンガ研究はまだまだ不足している。

3. これからのBLマンガ研究の可能性

BLマンガや腐女子文化研究を日本限定の現象として扱う事は、学者として維持できないポジションだという理由はいくつかある。

まず、BLマンガと腐女子文化は「日本発」の現象であっても、海外には同時に発達してきた類似の現象があるからである。社会的、文化的背景が違うため差異はあるが、類似点があまりに多く、そして構築してきた秘密組織のような女性ファンのコミュニティーの類似点もまた多い。これを無視するのは「もったいない」というだけでなく、学者として無責任と言える。類似点を発見すれば、そこを調べるのは学者として当たり前のことだ。

その類似点の一つは、男性のホモソーシャルな関係をホモセクシュアルに書き換える、パロディ的ともいえる腐女子の「方法」というより、「腐女子の生き方」である(図3:『男子はみなBL!腐女子の目撃体験』実在する男子、男性の関係の全てをBL的に解釈する実話マンガ)。家父長制をささえる男性間のホモソーシャルな関係を覆すジャンルの存在、そしてこのジャンルが国内だけでなく、世界中の女性に熱狂的に支持されていることは、ジェンダー研究の分野において重要な識見になりえる。男性の権力関係をいかにも簡単に書き換える日本の腐女子文化とグローバルな腐女子文化を比較することによって、グローバルなジェンダー論に多いに貢献できると思われる。

二つ目は、日本発のBLマンガのクリエイター、そして同じ腐女子文化のメンバーであるやおい同人誌マンガの作家と消費者は、作品において明らかに海外の影響を受けている。にもかかわらず、日本の腐

女子文化学者が海外の影響を拒もうとするのは不自然ともいえ、非生産的である。BL マンガと腐女子文化をグローバルな現象としてみようとしなない身構え、頑固なリージョナリズムは日本で行われる研究にも害があると指摘したい。グローバル化によってBL マンガは物凄い勢いで海外に「漏れて」しまったが、その事実を無視しつづけると、別の意味で、日本国内の研究に「漏れ」(lacuna) が現れるだろう。

こういった漏れをなんとかする動きは、幸いにも国内ですでに起きている。2010年大分大学で行われた国際BLシンポジウムは特に素晴らしい試みであったが、その数ヶ月前の、同様の大阪のシンポジウム「やおい/BL(研究)の今を熱く語る」での発表者が、大分では誰も発表していない事などから、日本国内限定的な評論と、グローバルな現象としてBLを研究する学者との間に乗り越えるべき壁と、壁を乗り越えようとしなない研究者とのズレを感じました。

社会学者として、そしてジェンダー・スタディーズ、クイア・スタディーズ、メディア論で活動する我々には、社会に対して、そして一員であるコミュニティに対してある程度の責任がある。学者としての役目の一部は、常に視野を広く持つことである。しかしそれよりも大事なものは、研究の成果を当事者と社会全般と共有することではないか。我々学者は、この不況の時代においても割と金銭的に恵まれているからこそ、自分たちの研究をできるだけ共有する「義務」がある。「ややこしくなるから」関係ない、「外国のことは知らない」等、こういったメンタリティーこそが真の社会悪を産み、多くの人が歪んだ情報にしかアクセスできない原因にもなるのである。最近の人間科学者は成果を出さないという批判は、特にカルチュラル・スタディーズに投げつけられ、この批判が妥当である時は残念ながら確かにある。「研究?自分の趣味をやっているだけだろう!」と言われないように、私達が研究する対象をグローバルな文脈で把握するべきである。

グローバルな文脈を把握することで、BL マンガ研究から何を得られるだろうか。日本国内の腐女子について得られた洞察が、海外の腐女子にも当てはまるのかどうかを調べることで、また日本国内の腐女子についても新しい識見も得られるはずである。

例えば今、国内の腐女子のコミュニティで心配されていることに「東京都条例」がある。ご存知の通り、マンガ作品中の性描写を規制しようとする条例であるが、腐女子の多くは、BL マンガのおかげで、「読んではいけない」年齢の時に、性描写を含むマンガを読むことで、身体で直接経験する必要なく様々な性的関係について知ってきた。今後の日本人女子にこういった勉強が出来なくなるということは問題視されている。しかし、こういった検閲による課題と直面するのはけっして日本の腐女子だけではない。米国において、英語でBLを書くヤミラ・アブラハム(Yamila Abraham, 2010)はインドネシアの腐女子についての論文をまとめた。経済的な不平等もあるため、米国のBL マンガ出版社数社は、作画をインドネシアのアーティストに委託している。しかし、インドネシアでは大人でも法律上性描写を描くのは一切禁じられている。インドネシア人の多くはイスラム教徒で、同性愛そのものは法律上禁じられてはいないが、同性愛の描写は処罰の対象になっている。よって、インドネシア人のBL作家は非常に危うい環境でBL マンガを描き、輸出し、収入を得ている。こういった海外で検閲に直面する腐女子の状況を日本国内で検閲と戦う腐女子の状況と比べることによって、国際的な視点で女性向けメディアにおける性描写と女性の市民権を脅かす保守的政治運動に対して、もっとコヒーレンスのある抵抗ができるようになることも考えられる。これは一例に過ぎないが、今後国内でのBL マンガと腐女子文化研究の内向的な閉鎖性の時代に開国を促していきたい。